

生活の中の
仏教語

お盆



ほっと通信編集委員 曾場 浩代

お盆は安居(出家者の研修)の最後の日、旧暦7月15日を「盂蘭盆(うらぼん)」と呼んで、その日に祖先供養の行事を行う風習が日本各地でよく見られます。旧暦の7月15日や新暦の8月15日に行い、盆踊りや地蔵盆、送り火など、地方ごとにさまざまな風習が行われます。お盆には、亡くなられたご先祖がこの世にかえってきて、わが家で過ごし、またあの世にかえっていく。そのご先祖を追善供養し、冥福を祈ることとして迎えるものだと考えると、迎え火・送り火なども心にあたたかさが灯ります。一方で、浄土真宗の教えは、迎え火・送り火は行わず、少し一般的なお盆の捉え方と異なるようです。

亡き人を案じ、無事に成仏されるよう祈る心は、亡くなってなお大切な人を想う心の表れでしょう。しかし、亡くなった方を大切に扱うことで今生きている子孫である私たちに利益が与えられますように、と願うのであれば、亡き人を大切に想う気持ちがいつしか自分たちへの利益を願う気持ちに逆転してしまうことがあると思うのです。

亡き人は、この世に残った者が自分を大切に扱わないと利益を与えてくれない厳しい存在ではなく、私たちの生き方を導く「諸仏(しよぶつ)」として浄土真宗の門徒(信徒・檀家)は受けとめてきました。「諸仏」とは、私たちが人としてどのように生きていくのかということに気づかせ、導いてくれる仏さまです。

亡くなった方は仏さまですので、私たちが日ごろの生活の中で当たり前としている「損得」や「何かのお礼に、何かを与える」という意識を超えた存在なのです。

「盂蘭盆」は「倒懸(とうけん)」、「さかさにひっくりかえる」という意味があります。もうこの世で生身で会うことはできなくても、心に想うことで亡き人と会うことができる。大切な存在でありながら、生きている間はその大切さに気がつくことができず、亡くなって初めて気がついてしまう。亡き人を思う気持ちが、いつしか私の利益を願う気持ちになっていた。亡き人との間には、さかさにひっくりかえることばかり。

そんな季節をお盆として、私たちは生活する中で、このさかさにひっくりかえることから見えってくるものを大切に、先祖代々のいのちをつなぎ、生きてきたのでしょうか。

もし、私が亡くなり、祖先となったならば、後世のひとに何を願うでしょうか。いつもときかさまに考えてみると、私たちの先に仏さまとなった亡き人は、今年はどのような言葉をかけてくれるのでしょうか。

(1004字) (真宗大谷派 慈光寺衆徒、東北教務所駐在教導)